

WWA series
(World War2 After)

N4

Vermilion Pleasure Night

Deutsch x Italy

R18

Adult only

Axis powers
HETALIA

Only Fan book vol.09

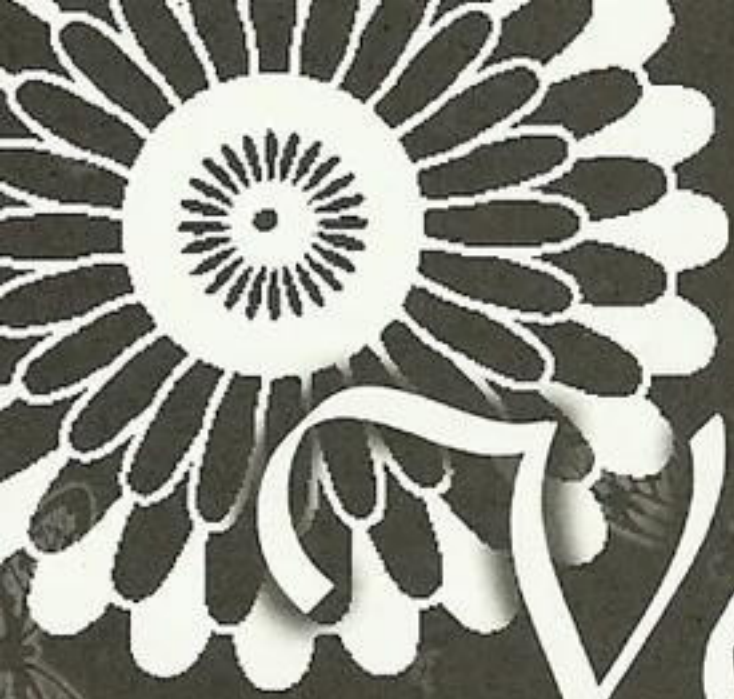
鋼鉄朗。/さきいか。

All production.

Vermilion Pleasure Night



Deutsch x Italia TheworldwarAfterseries of AxisPowers Hetalia



Vermilion Pleasure Night

Axis Powers Hetalia fan book
Deutsch x Italy only wwa sriase vol.04
Presents by 鋼鉄朗。(さきいか) 2009.12.29

For Adult

...18歳未満の方の購読を禁じます。



Vermilion Pleasure Night

Deutsch x Italia Theworldwar Afterseries of Axis Powers Hetalia

こんにちは、鋼鉄朗。のさきいか。と申します。独伊独伊と言い続けて
いよいよ4年目に突入しました。…その割には発行ペース遅いよ何やってんの！
と、自分を叱責しつつ、それ以上に今回のこの本、初めての貫通前提のエロ本
な事実気付き驚愕しました。頭の中ではあの子達、1日3回×365×3=3285回
くらい既にやってるんですが…あ、スイマセン引かないで下さい、嘘はないのですが。
そんなワケで、前回のシリーズから1年以上経過しちゃってますが、この本は
独伊新婚シリーズ～WW2後のあの子達結婚してるよね常考～と言う本の3冊目
になってます。3冊目なのにvol.4表記なのは、ちょっと突飛して夜の性活特化本なので
大分意識を飛ばして下さいね～…というコトと、既に出てるつもりだったvol.3が
未だに出せていないからです。…発行遅いよ！何やってんの！！
もしも最初の告知から待ってて下さった方がいらっしゃいましたら、本当にスイマセン。
その分、楽しんで頂けていれば幸いなのですが…あ、エロ本ですが…。
エロ本はエロ本でも、この本ちょっと特殊と言うか、…あ！
か、かか貫通前提だけどドイツのナニがインサイトしてるわけじゃないじゃん…！
驚愕の事実。初ハメ描写を私はいつまで引っ張るつもりなのか。…とりあえず、そんな
本です…。(手元には大量にあるんですけどね…その、ハメ…/他に言い方ないのか私)

Opening Talk



あなたのパートナーは
その性癖に理解が
ありますか？

あなたは特殊な
性癖を持って
いますか？

← **YES**
← **NO**

パートナーに
不満はありますか？

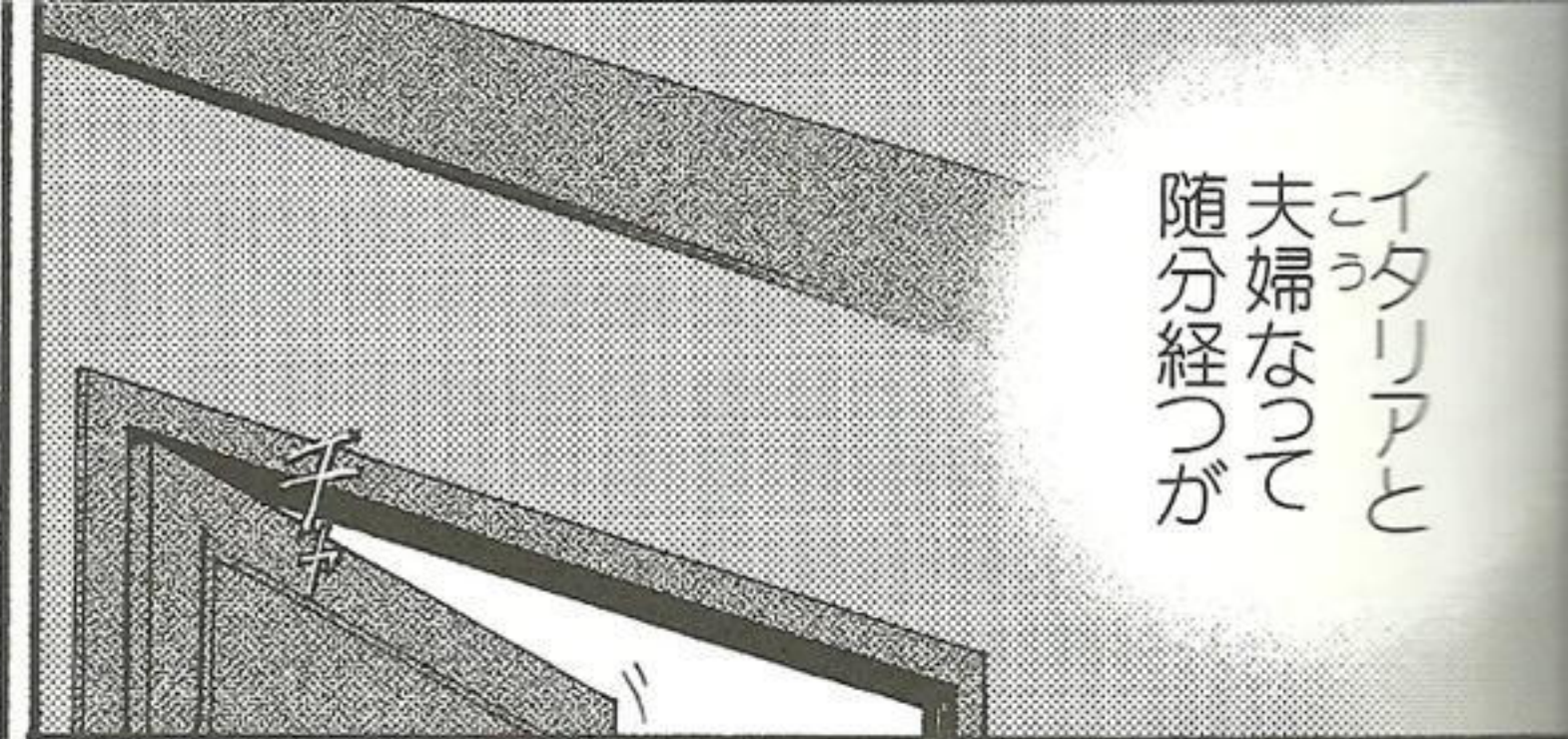
Pleasure

Night

嫌われる覚悟で
性癖を
晒しますか？

Nein

イタリアと
夫婦なつて
随分経つが



時が凍つたのは
久し振りだった



お帰り〜

あドイツ

ブルブル

なにをじて
いる——?!

あ
うん

なんか凄いな
って思ったから

↑世々の。

そうじゃなくて
ソレは何だ?!

どす
どす

「こんにちっ!」

……っ

……ち、違う
違うぞっ

これは仕事で
上司に検品を
頼まれて
仕方なくっ

そもそもこれ
こゝ寝室じゃなくて
執務室に
あったろう?!

そーなの?



ドイツDSだから
こういうので大変な
コトしてるのかと
思っちゃった



ちよつとまで
なんだそれ

確かに俺の内には
そういう性癖が
あるのは認めよう
…認めるが



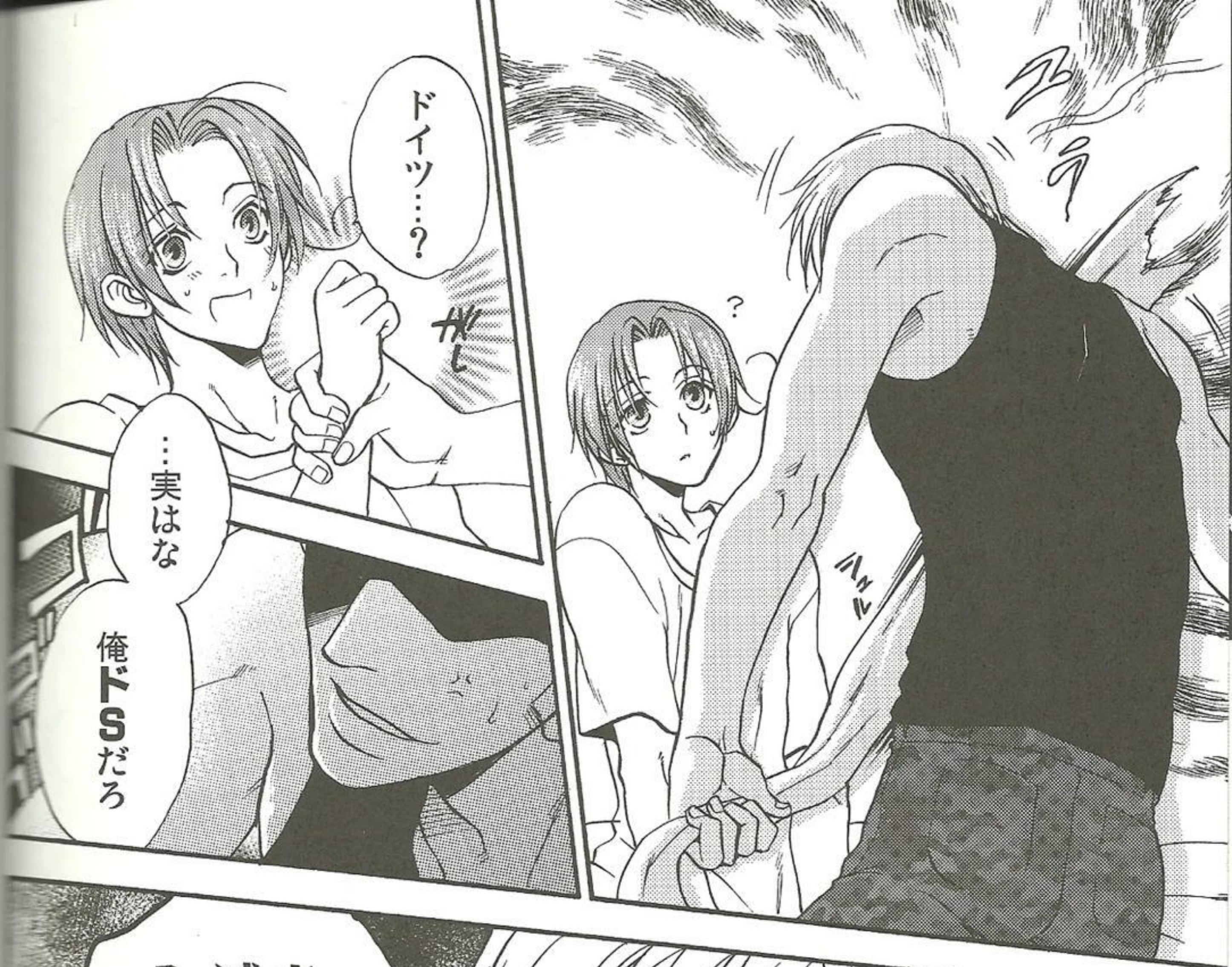
お前が嫌がるから
怖がらせたくないから

至極フツに

濃厚でもフツに

冒険無しでフツに

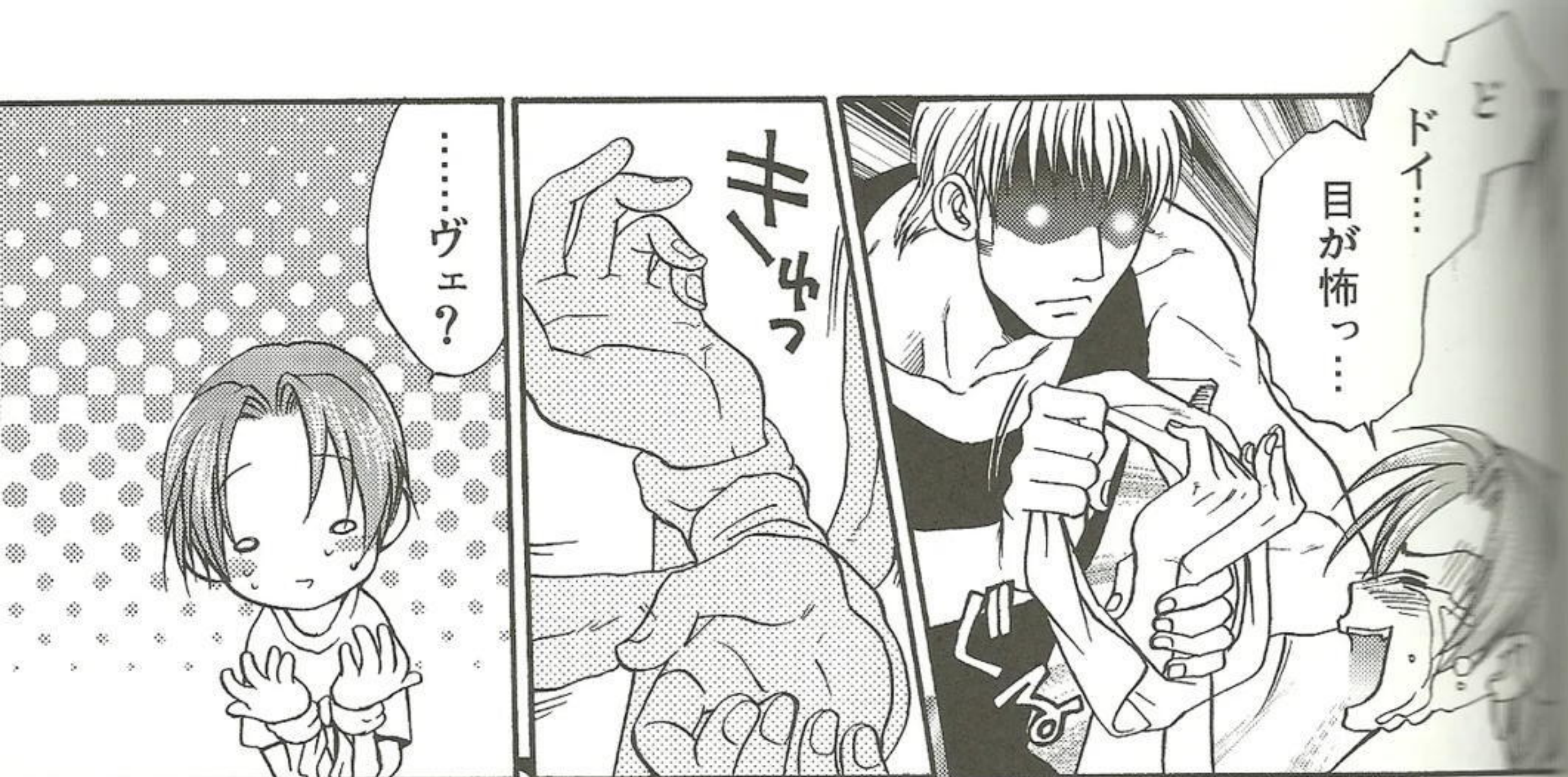
性生活を営んできた
俺達ではないのか…!!?



お前を
滅茶苦茶にして
みたかったんだ

一度
こういうので

ぴ





さて…

どれからいくか

ドイツ

俺あんまり
こーゆー
趣味は…

がしや

がしや

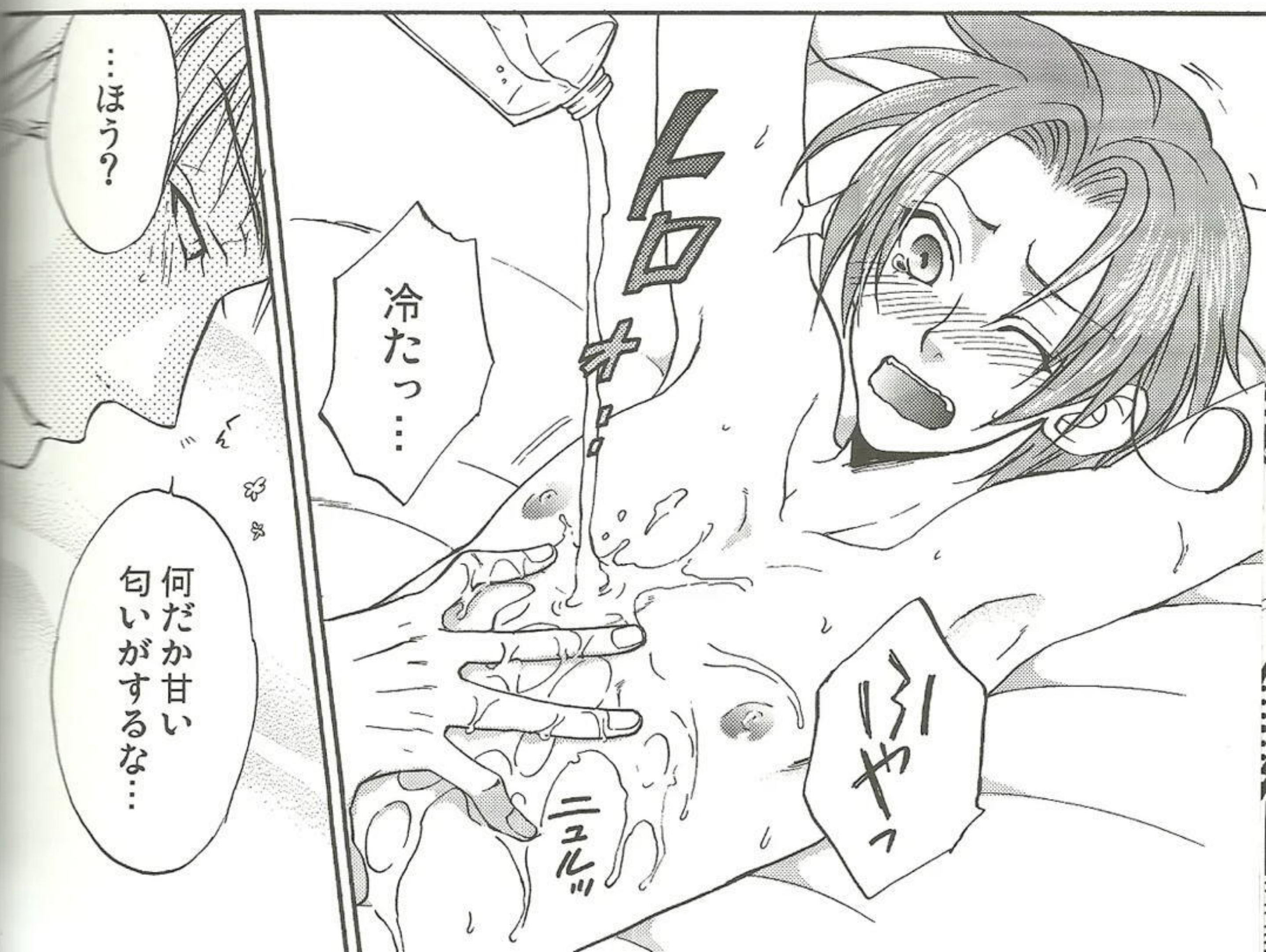


分かって
いるとも

俺の趣味
なんだろう？

…コレからいくか

ギョ



トロ

冷たっ…

びや

ニユル

…ほう？

何だか甘い
匂いがするな…

蜂蜜味だと
舐めてみるか？

んんっ

む

130 あ！

おっ

美味しく
ないよお…

まああくまでも
無害と言う
だけだからな

んはっ

んく

カキユ

ニキユ

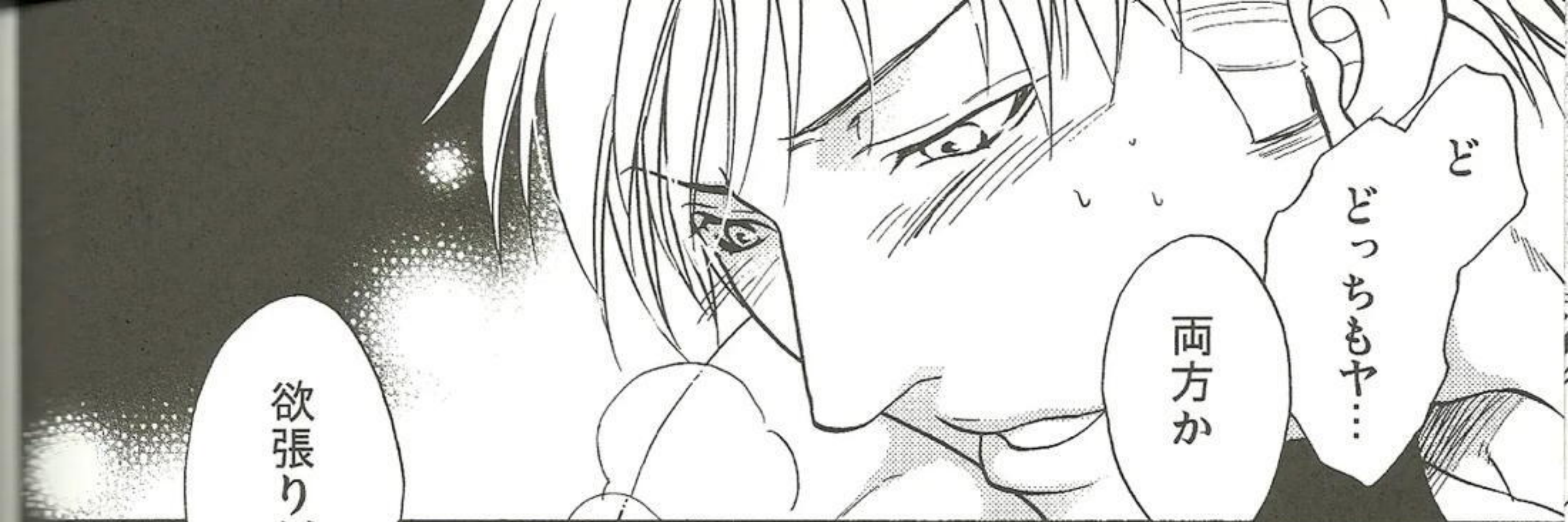
んっく

ふう

んんんんん

どっちがいい？

ふえっ



ど
どっちもや...

両方か

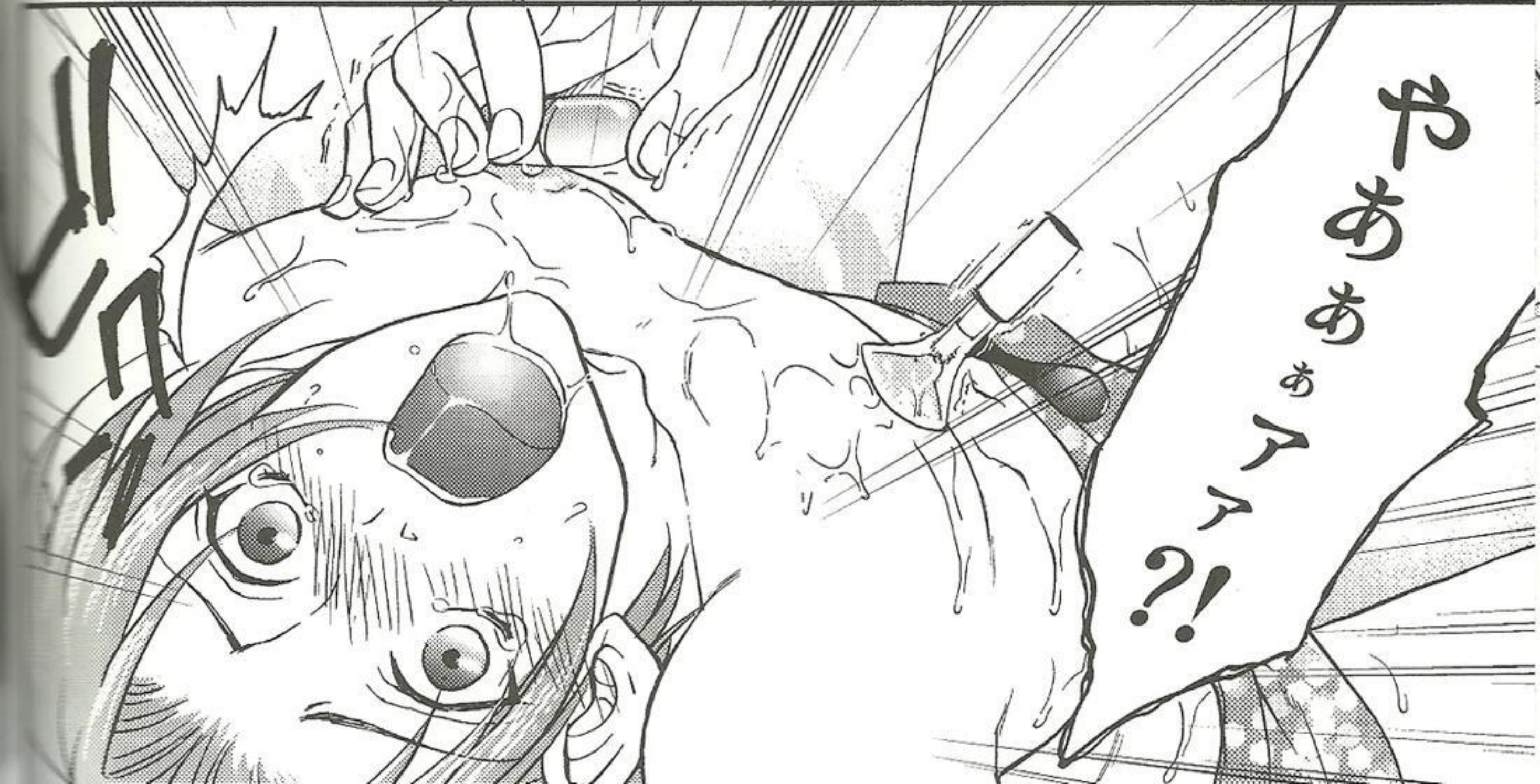
欲張りだな



違っ

ひやう

ハヤハヤ♡



あああ

?!
アアア

ハヤハヤ



これは
あてがうより

こうした方が
いいのか...?

ひゃあ?!
やっやっ
あア
ははは
♡♡♡

グワッ

ギョッ

ギョッ

グワッ

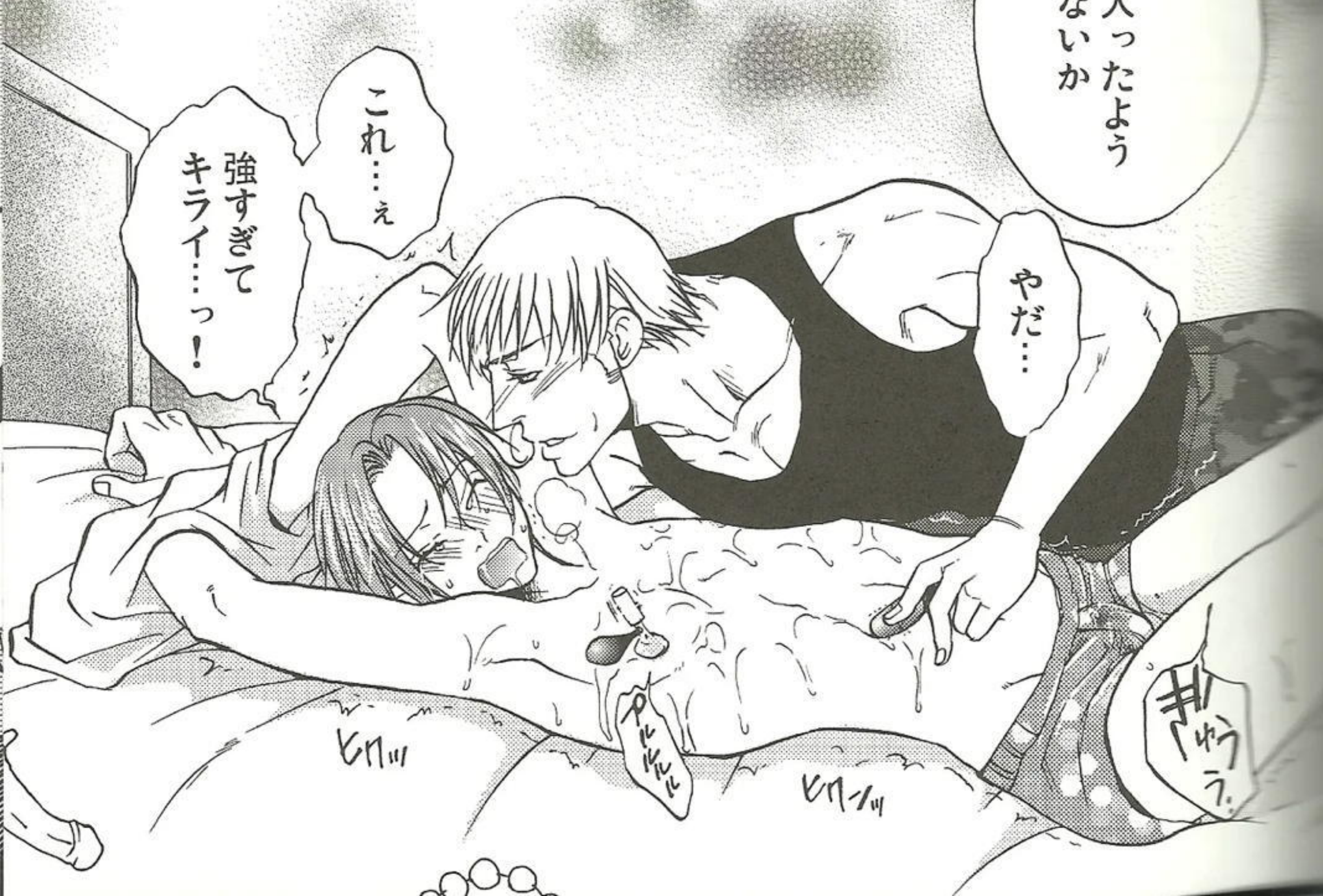
や

は



随分
気に入ったよう
じゃないか

じあ



やだ...

これ...え

強すぎて
キライ...っ!

ギョッ

ギョッ

ギョッ





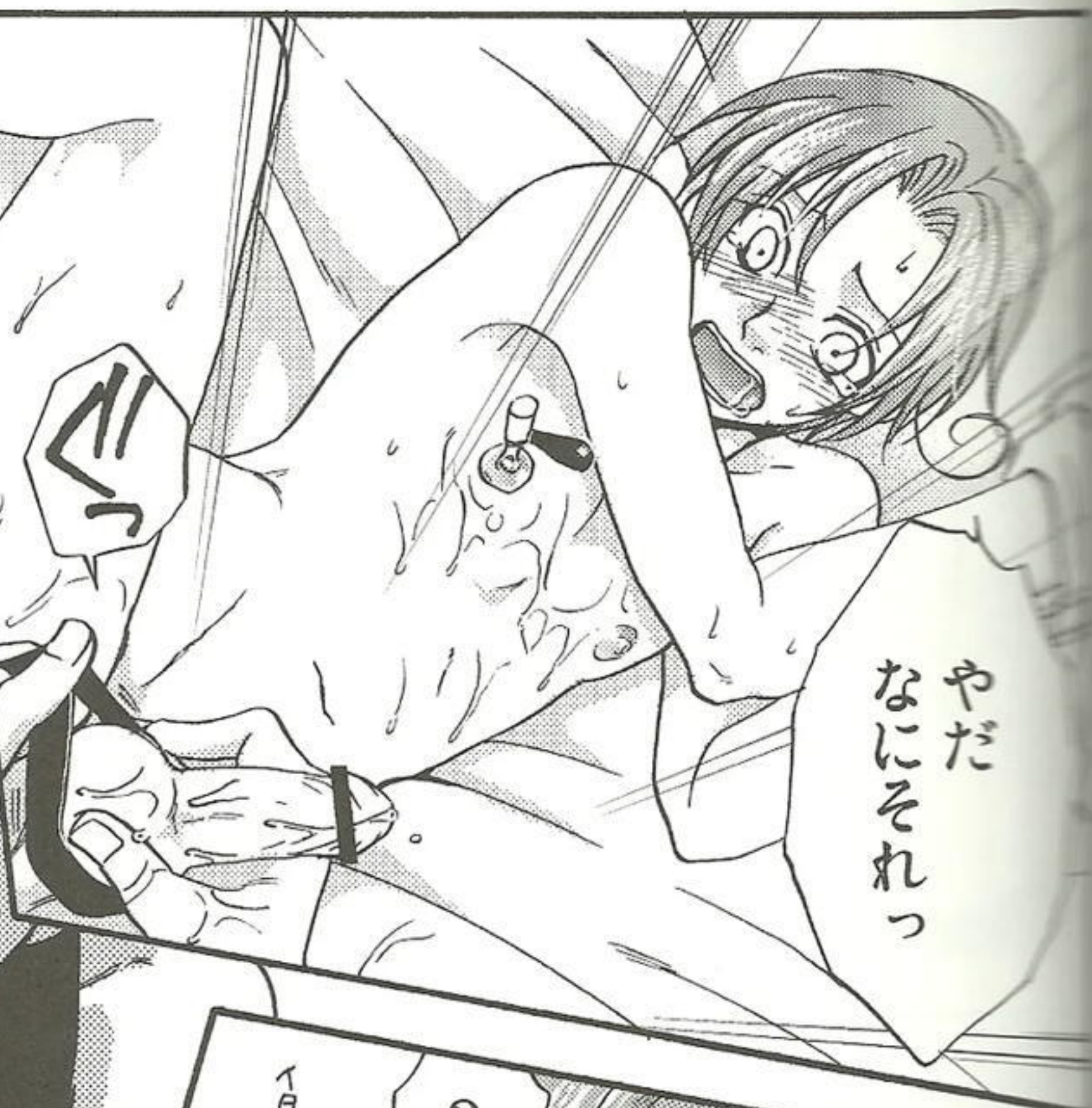
早漏のお前には
もってこいじゃ
ないか？

カサ



『痛み無く
フィニッシュを
妨げます』…

…ドイツ製
だな



やだ
なにそれっ



イタ…

？

??



お前は俺が
滅茶苦茶サドで

どえすって
いったの
怒って…の…?

こういった
如何わしい道具で
弄ぶような男だと
思った上で結婚
したんだろう?

ならば少しは相手
の性癖に付き合っ
たらどうだ

そんな
つも…!!



うっ

ソッ

アキッ

アキッ

アキッ

ソッ

イヤだイヤだと
連呼する割には
随分とほぐれてる
じゃないか



お前は本当に
淫乱な身体を
している…

…ん…ん



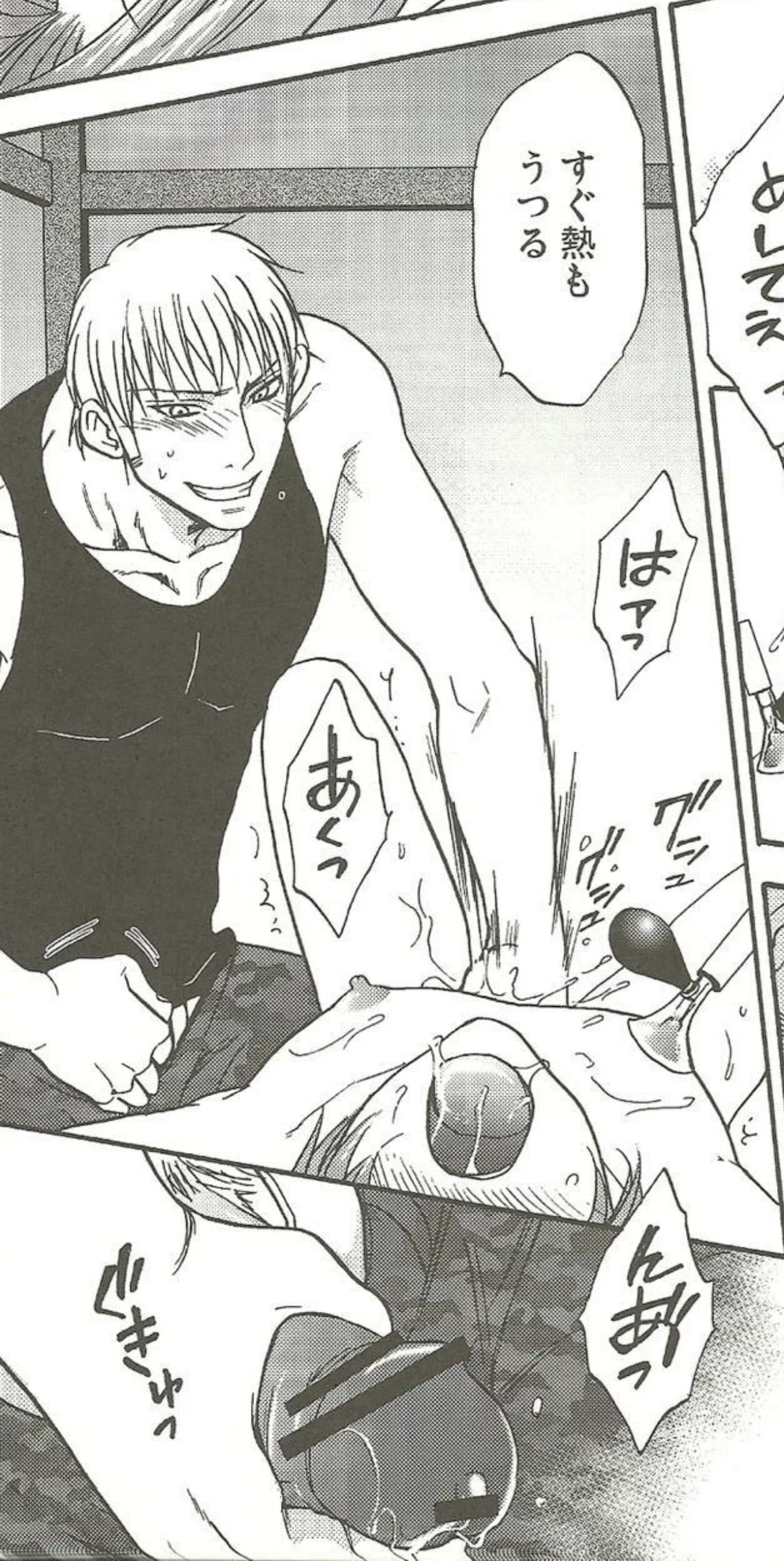
これなら
すぐに挿入り
そうだが…

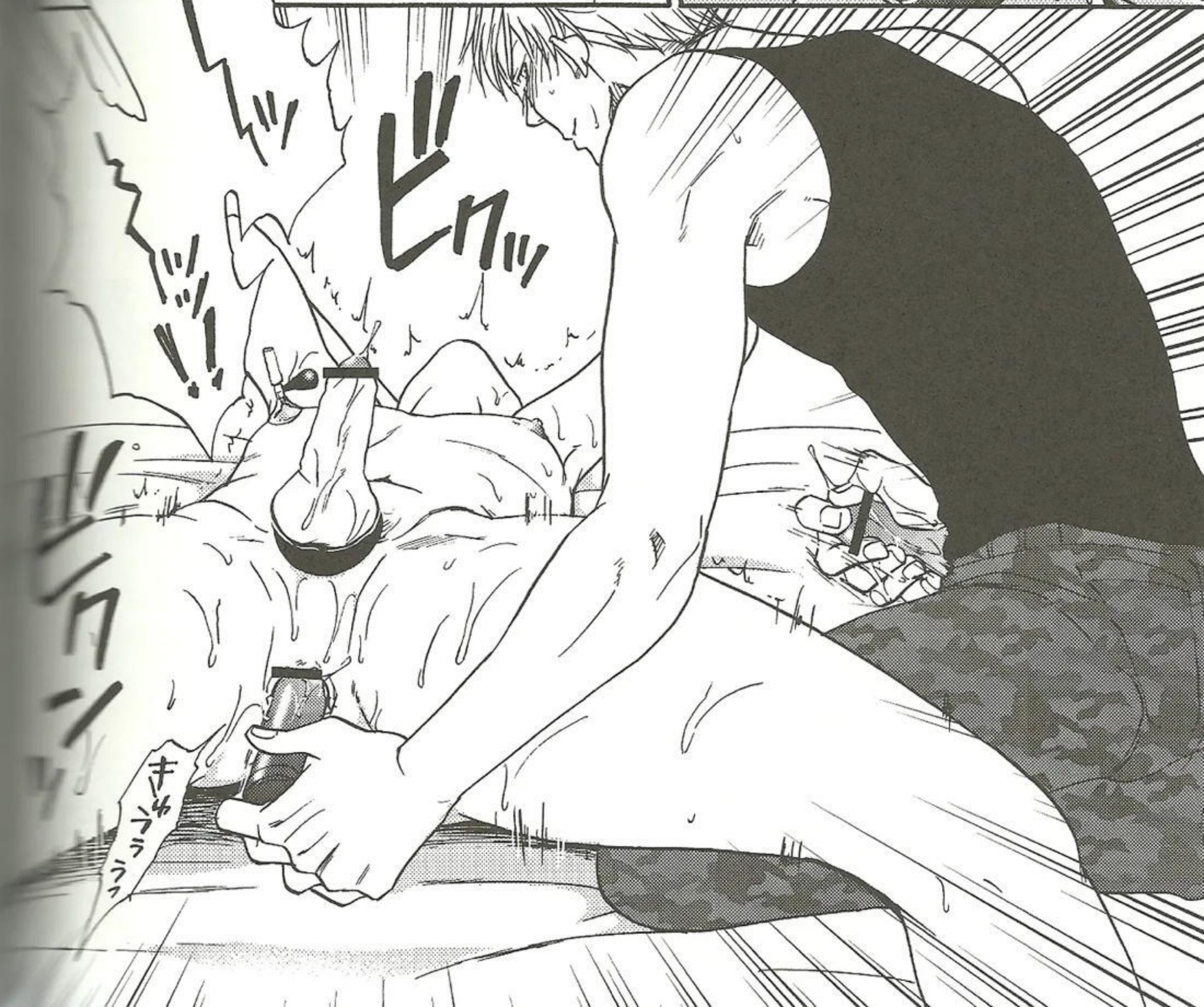
この辺に
しとくか…?

ホントに
やだーあ

やだー

1370





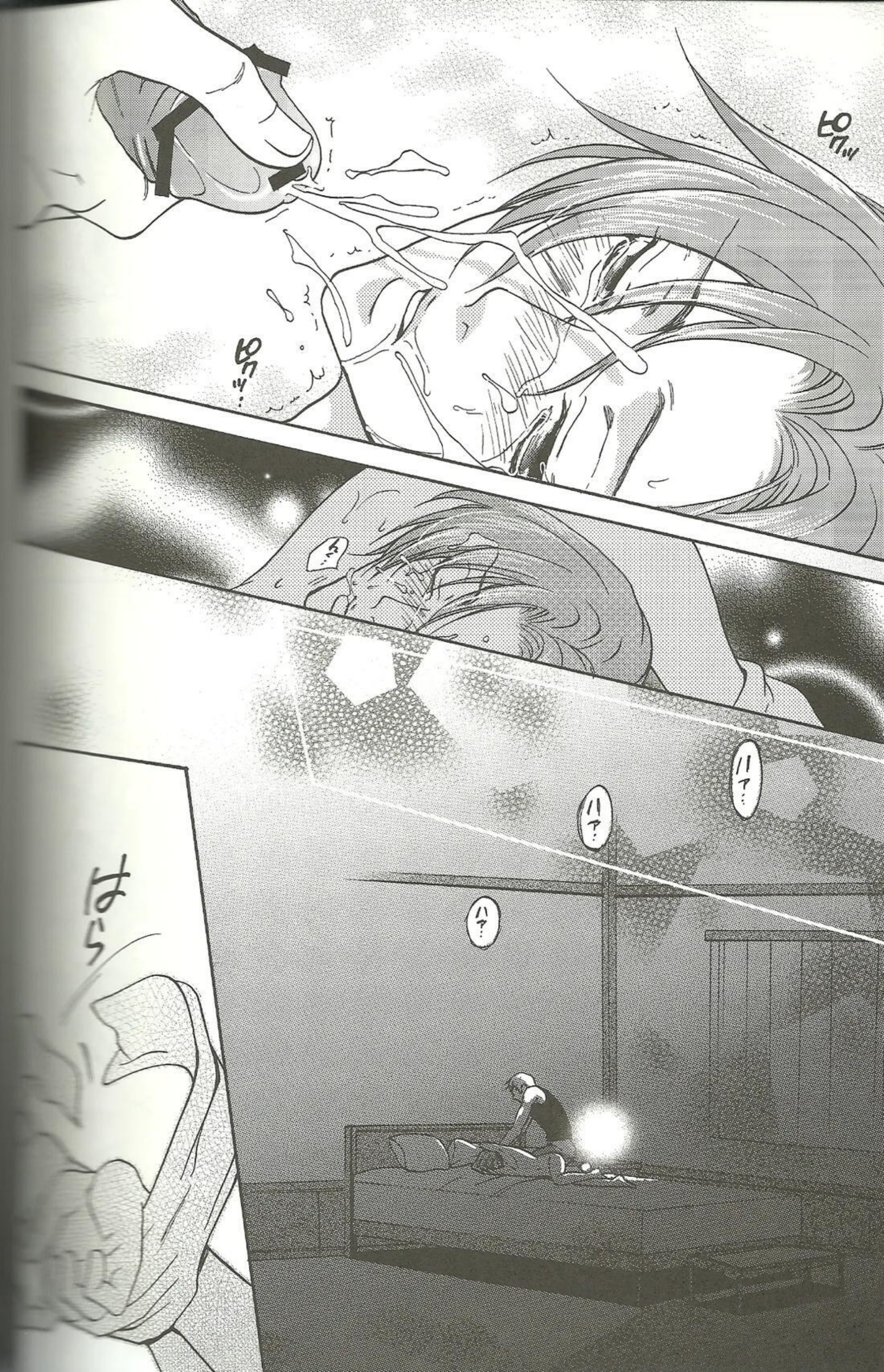


そうだな...

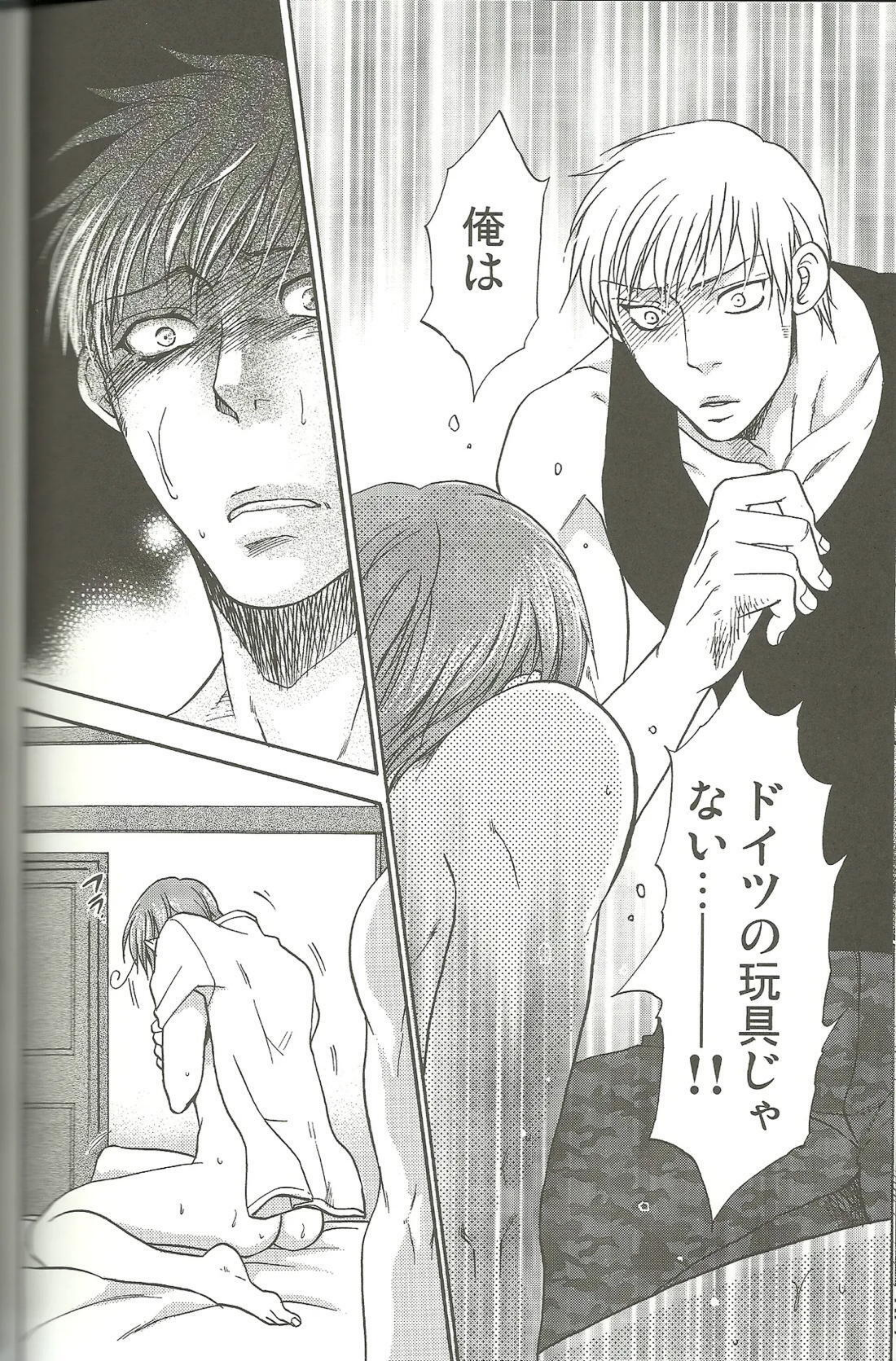
ドレが一番
悦かったか
答えられたら
外してやる











俺は

ドイツの玩具じゃ
ない……!!

フラ



イ
タ
リ
ア



イタリア……!

グッ

アイツの軽口は
いつもの事で

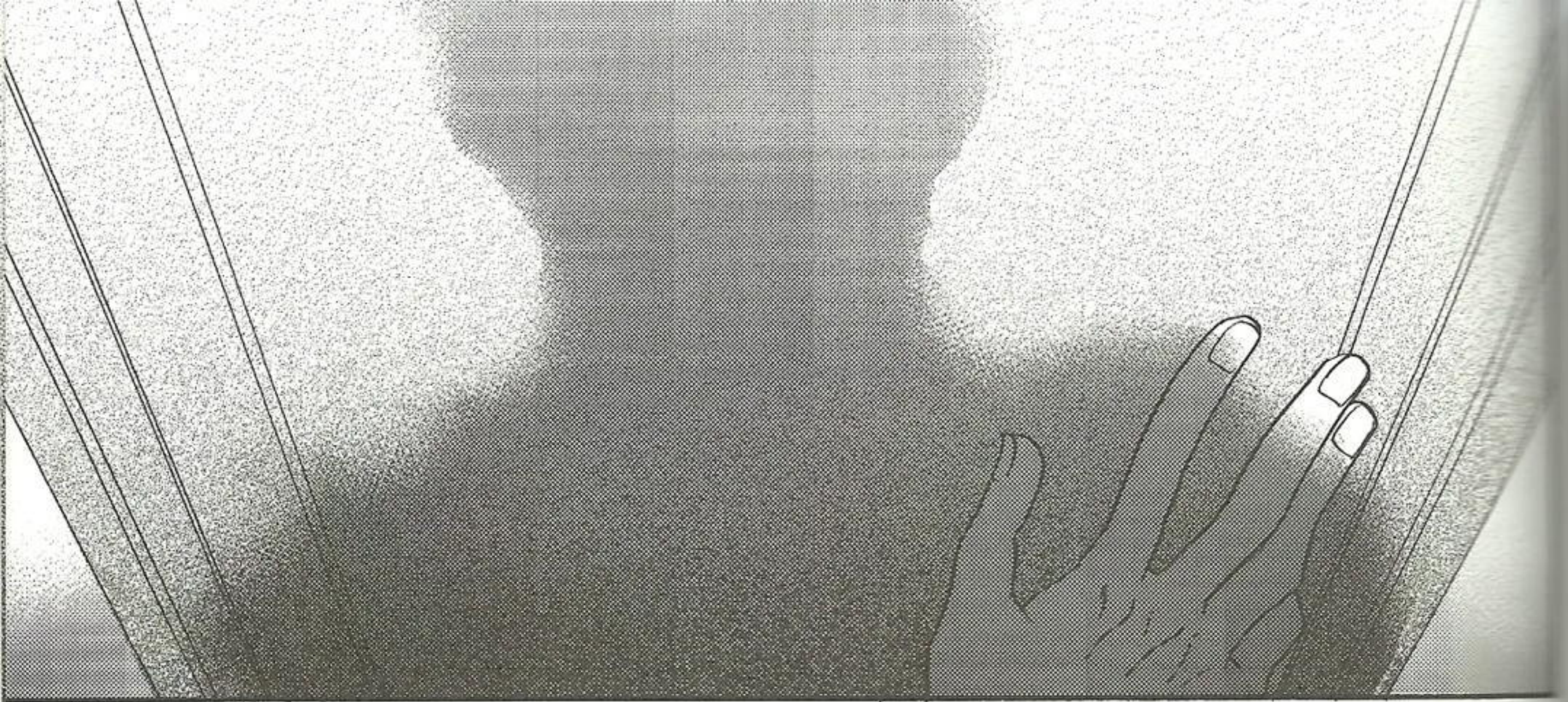
そこには悪意も
何も無いのに

知っていたのに

あいつの言う通り
まるで玩具にでも
するかのよう
に弄んだ

俺のした事の方が
よほど人格侵害では
ないか……!!





↑ゲストルーム。



頼むから
出てきてく…



ヤミヤミ

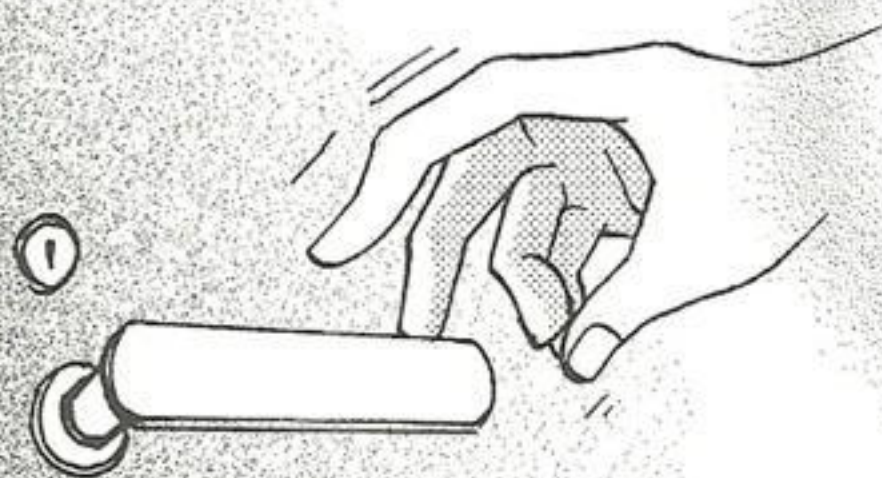


イタリヤ…

俺が悪かった

このとおりだ

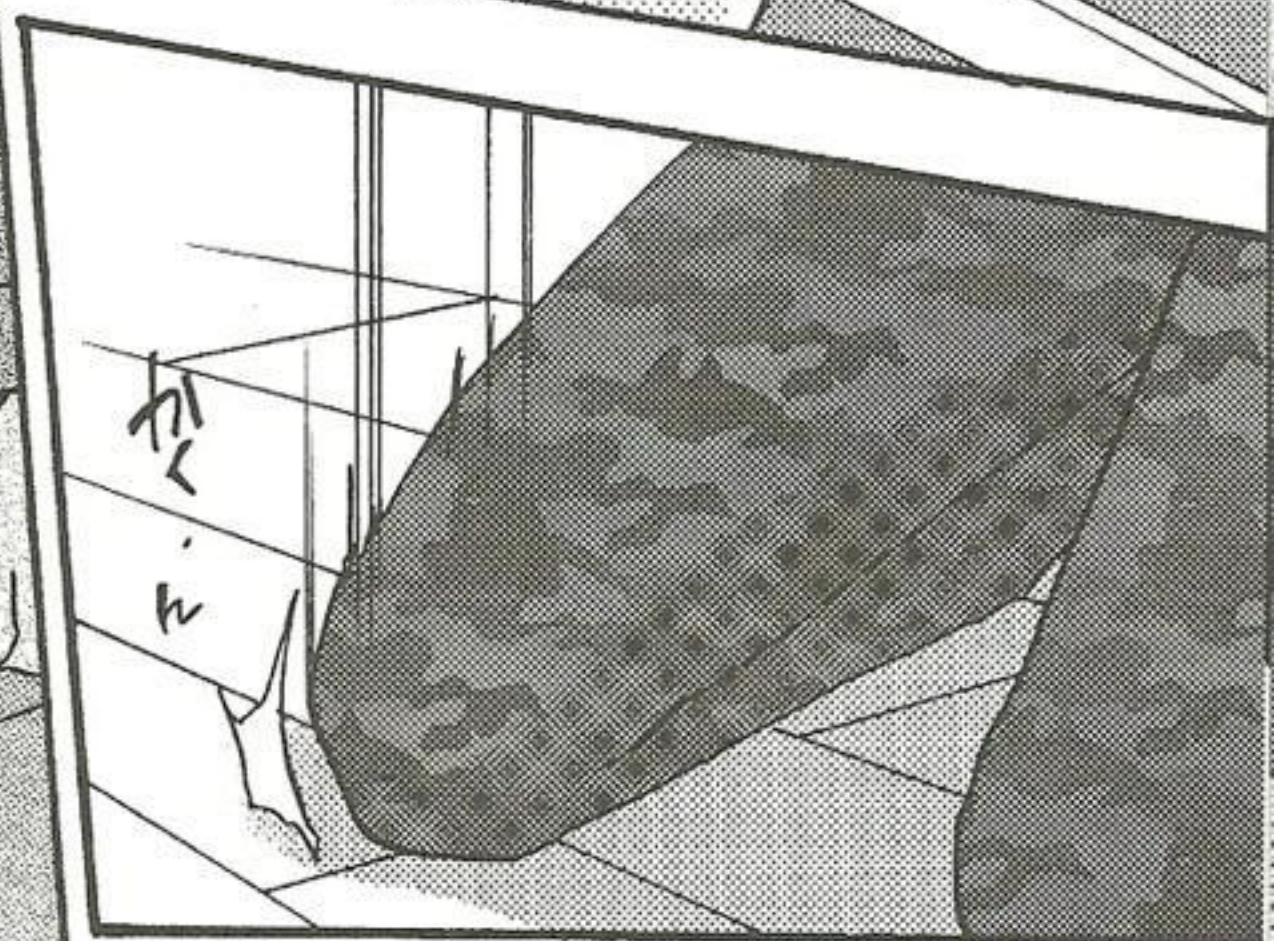
鍵…



かかつて……

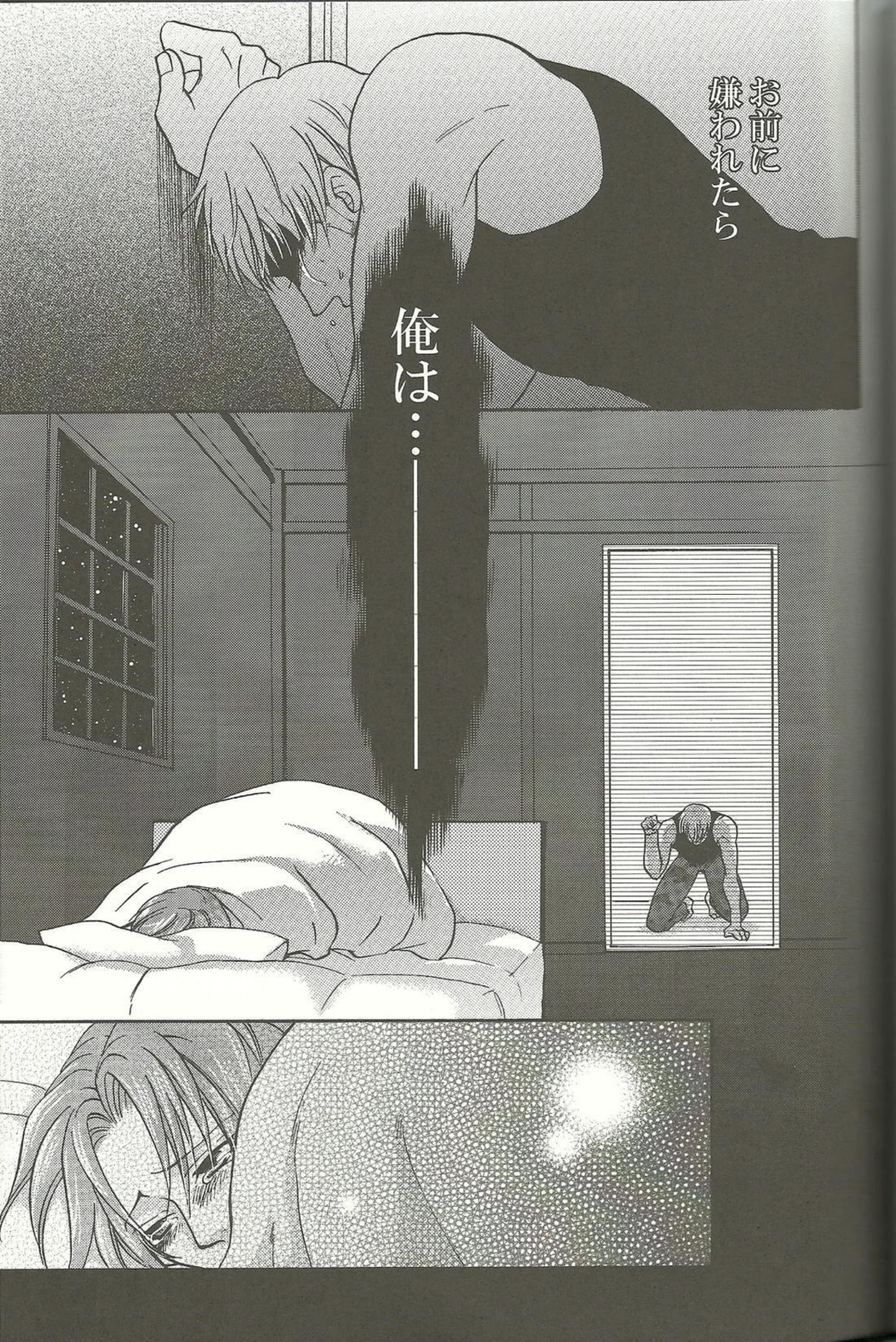


イタリア……
ッ



お前に
嫌われたら

俺は……



To be continued...

続く予定は無かったんですがタイムアップ…！
後編はVPN2にて。
←後味悪い所で終わっちゃったんで、次Pからの
ゲスト様のラブい小説でお口直し下さいませ！
監伊の基本味は砂糖の蜂蜜和えミルク風味。

*

目の前に並べられた奇妙な道具の数々を見下ろし、ドイツは深くため息をついた。呆れとも、諦めとも、自虐とも取れる微笑がその口元に浮かんでいる。

どぎつい原色の赤や緑、なまめかしい肉色、乳白色、サディスティックな黒——などなど、色とりどりのそれは一見グロテスクで、しかしよくよく見るとむしろコミカルで滑稽にも思える。エロスと笑いとは紙一重なのだ、と別に知りたくもない事実をドイツは知った。

そう、滑稽だ。この状況も目の前に並べられたガラクタも、そしてこんな物を前に真剣に悩んでいる自分が何より一番滑稽だ。

そもそもの始まりは、ある夜のことだった。

紆余曲折を経て、ドイツが晴れてイタリアと結婚したのは半年ほど前のことだ。結ばれるまでの果てしないすれ違いを埋めるように、彼らは夜毎に愛を確かめ合った。その日も二人は愛し合い、平和で満ち足りた平凡ながらも濃密な夜を過ごしていた。しかし行為のあと、先にシャワーを浴びて部屋へ戻ったドイツは見てしまったのだ。

ベッドサイドの間接照明だけが灯る薄明るい部屋の中、イタリアはベッドの隅に腰掛け、なにやらもぞもぞと体を動かしていた。なんとなしに近寄りたいたい空気を感じ、ドアの影からこっそり様子を窺うドイツの目に写ったものは——背中を丸め、自慰に耽るイタリアの姿だった。

がつんと頭を殴られたような衝撃だった。

はやる鼓動を抑え、ドアの影に隠れる。しばらく呼吸を整えてから、もう一度そつと部屋の中を覗き込めば再び目に入ったイタリアはやはり、自分で

自分を慰めていた。先ほどあれだけ愛し合ったのに、なぜ——しばらく呆然とその姿を眺めていたドイツはやがてはっとして自らの口元を押さえた。

思えば、元々はイタリアは女性が好きなのである。男性として経験があるか否かなど確かめたことはなかったが、その欲求がないとはもちろん言えないだろう。自分はいつもイタリアに挿入して満足ではあるが、もしかするとイタリアからしたら女性役に徹するセックスは不満なのではないか。初めの頃はまだしも刺激的であったとしても、半年が過ぎ、もしやマンネリに感じているのではないか。つまり——

イタリアは自分とのセックスに満足できていないのではないか。

結論に思い至り、ドイツは再び激しくショックを受けた。まさに青天の壁れき。この幸せな夫婦生活にこんな落とし穴が待ち受けていようとは！

その場は見なかったふりをしてやりすごしたものの、しかしその光景はくつきりとドイツの脳裏に焼きつくことになった。彼は元来、真面目で研究熱心な性質（たち）なのである。この

ままではいけない、性の不一致は離婚の最も大きな要因でもある。今のままで不満だというのなら、果たしてイタリアを満足させるにはどうしたらいいのか、自分にそれができるのか――。

「また溜息ですか、ドイツさん」

「えっ」

顔を上げると、正面に座る日本が困ったように微笑んでいた。会議中、無意識のうちに幾度となくため息をついてしまっていたようだ。イタリアの前ではなるべく悩む姿は見せないようにしていたのだが、今日はその本人が欠席（サボタージュ）しているのどつい気を抜いてしまったらしい。

「何か悩み事でも？」

ちよつと休憩にしましょうか、お茶を入れますねと日本が席を立つ。熱い緑茶をドイツへ手渡しながら、もし良かったらご相談に乗りますよ、と言う日本にドイツはしばらく逡巡し、思い切って悩みを打ち明けてみることにした。一見幼く見えても長い歴史を持つ日本のことだ、何か良いアドヴァイスをくれるかもしれない。それに、日本には古くから男性の文化があると聞い

ている。

「……笑わないで聞いて欲しいのだが、」

勇気を出して口を開いたドイツの話を、日本は真摯に聞いてくれた。そして出された提案が、この、今日の前にある色とりどりのいわゆる「大人の玩具」というわけだ。

「例えば一般的に日本人男性は性器が小さいと言われていますが、何も自分の体だけを武器にすることはないので、自分勝手に行うを行わず、前戯にたっぷり時間を掛けて、相手をまず満足させてから挿入する。これでお互い深い快感と満足感を得ることができるとでしょう」

逆に逸物に自信があるからと言って挿入ばかりに頼ってもいけません、と日本はドイツをたしなめた。

「な、成程――」

そう言われてみると今までは通り一遍の前戯しか行ってこなかったかもしれない、とドイツは反省した。ましてや女性ではない、男であるイタリアを相手にするのはから通常よりも気を使

わなければいけないのは至極当然。これでは手抜きと言われても仕方がない。イタリアが満足できなくても当然だ。

では前戯とは何をすれば……と問うたところ、テクニクに自信がなければいろいろな道具もありますよと教えられたのがこれだった。

「……とは言え、いざ目の前にするとなあ……」

ドイツは改めてそれらを見下ろして腕を組んだ。

正直使いこなせる自信がない。楕円形の小さな卵型をしたバイヴレータ、円形の連なったパール、不思議な曲線を描く細い棒のようなものに至っては、どう使うのか想像も付かない（一応渡された説明書を読んでみるとどうやら前立腺を刺激する道具らしい）。

「……よしっ」

悩んでいても始まらない。まずはチャレンジだ。とりあえず手始めにこの辺りから使ってみようといくつかの道具を手に取り、ドイツは一人拳を握り締めるのだった。

「そろそろ寝ないか、イタリア」

夜の帳の下りたのち。ドイツがその声を掛けると、TVを見ていたイタリアが待ってましたとばかりに飛びついてきた。その愛らしい笑顔、猫のように擦り寄る仕草がいとおいしい。結婚して毎日長い時間を共に過ごすことが始めは不安だったのだが、飽きるどころかどんどんイタリアにのめりこんでいく自分を感じる。あまりに幸せで怖いくらいだ。

実際問題、ドイツは本当に恐怖を感じることもある。この気持ちが自分だけのものだったらどうしよう、いつかこの幸福が終わってしまったらどうしようという恐ろしさだ。イタリアを愛しく思えば思うほど、いつか失うのが怖い。だからこそ愛し合うその瞬間もイタリアにもできるだけ満足して欲しいという気持ちはおかしいだろうか？

寝室へ入り、ドイツはイタリアをベッドに優しく押し倒してその脛にキスをした。気持ちよくノリの効いたシーツからはふわりと日向の香りがする。昼間ドイツが仕事をしている間にイタリアが干したものだろ。イタリアは戦場では実に怠け者の癖に、家事など

をやらせると驚くほど手際よく丁寧にこなすのだ。

口付けして見詰め合う。うっとり自分を見詰めるイタリアを一刻も早く抱きたいと思いながら、ドイツはそつと囁いた。

「イタリア……今日はほんの少し趣向を変えてもいいか？」

「? いいけど……なに？」

僅かに首をかしげるイタリアに、心配しなくて良い、ただ俺の言うとおりにしてってくれとだけ告げた。

イタリアは不思議そうな顔をしながらもうんと頷く。

よし、ここからが本番だ。ドイツは一度深く深呼吸して、そつとイタリアの手を取った。

「少しだけ……じつとして」

安心させるように耳元で囁きながらサイドテーブルの引き出しを開く。その中から柔らかいピンクのフェイクファーで覆われた手錠を取り出し、恐怖心を与えないようゆっくりとイタリアの両手首を拘束した。

「えっ……ドイツ? これ？」

きょとんと瞳を見開くイタリアにも

う一度口付けをする。手錠の鎖はベッドの柵に通して、それだけでもうイタリアの動きはまったく封じられてしまう。

「んっ」

舌を差し入れ、いつもよりも丁寧に、優しく口腔を愛撫する。甘い舌を追いつけて深く絡めればイタリアはすぐに熱い吐息を漏らした。

「はっ……あ……」

「痛いことはしないから……」

優しく囁く。イタリアはうるんだ瞳に困惑の色を滲ませながらもドイツを見上げて頷いた。

その瞳をいつまでも見ていたい気持ちをぐつと堪えて、ドイツは次の道具を取り出す。それはソフトな黒い生地で作られたアイマスクだった。

「え……め、目隠しも……?」

「大丈夫だよ」

第一拒否しようにもイタリアにはもう抵抗はできないのだ。その両手は自分の手の中にあるのだから。

そう思うと僅かに、自らの胸に何か不思議な興奮が生まれるのが解った。

「イヤか？」

イタリアはほんの少し考えるような仕草をして、ふるふると首を振った。

「……いやじゃない」

ドイツの言うとおりにする、とイタリアは微笑む。

アイマスクを付けてしまうと、それだけでイタリアのその姿は随分と非日常的なものになった。愛しい相手が自分に全てを委ねる証拠に、両手を柵に繋がれて目隠しをされている——恥ずかしそうに身を振る仕草までが扇情的で、ドイツは強い欲情を感じた。ふと見ればイタリアの頬もうつすらと上気して、これから起こる出来事が何かと期待しているようにも見える。

なるほど、たまにはこういうのも刺激的だ。

ドイツはゆつくりとイタリアのシャツを開いていった。釦をひとつ、またひとつと開きながらその首筋、鎖骨、胸元へキスをする。そのたびにイタリアの体はぴくりと震えた。次の行動が見えないせいか、いつもより反応が大きい。

「っあ、あ……ひゃん、」

けに合わせて肩を震わせる。いよいよ全ての釦を開いてその膚を露わにしてから、ドイツはほんの少し体を離れた。

白い胸の上の小さな突起は既に勃ちあがり、触れられる期待にぴんと張っている。いとおしいその桃色に、ドイツはそつと舌を這わせた。

「ああっ！」

ビクン、とひときわ大きく身体を震わせたイタリアが嬌声を上げる。逃げられぬよう押さえつける様に体重を乗せながらも片方を指先で捏ねつつ、尚も舐り、甘く噛んだ。ビクビクと何度も震えるイタリアの身体が次第に汗ばんでいく。

「やつ、あ、こわい……こわいよ、ドイツっ」

視界を奪われ拘束されて与えられる刺激は普段よりも強いようだ。ふるふると首を振るイタリアにサディスティックな興奮を覚えながら、ドイツはさらにその下半身に手を伸ばす。

「……と」

そうだその前に。

再びサイドボードから、今度はローションのボトルを取り出した。透明で

粘度の高いジェルをたつぷりと自らの掌へ搾り出し、そのままイタリアの性器へとなすりつける。

「!？」

再び大きくイタリアの身体が跳ねた。

「な、なに!? あっ」

ぬるぬるとしたローションの感触にイタリアは身を振じらせたが、両手をしっかりと繋がれているので逃げることはかなわない。やがてすぐにその声には甘さが混じってきた。ドイツはローションの感触を確かめるようにゆつくりとイタリアを擦り上げる。

「や、ドイツう……! なに、なにこれ!? ああっ」

ドイツの手の中でイタリアのそれは急速に追い上げられ、愛液を滴らせて震えた。絶頂が近いようだ。

「あ、だめえっ……ふああ、」

「イタリア……いきそうなのか?」

かあつと赤面しながら、何度もイタリアは首を振る。

「こんなにすぐに? いやらしい子だな」

「あつ、ごめん、だって、だってえ……」

……」

達する瞬間の顔を見たい。

涙声で喘ぐイタリアがどうしようもなくいとおしく、いや、見ないでえ、と懇願する声を見無視してドイツは彼のアイマスクをそつと外した。

現れたイタリアの瞳は蕩けるように潤んでとてつもなく色っぽく、思わず嗜虐的な笑みが零れてしまう。

「あ、いっちゃう、いっちゃうよお、

ドイツ……！」

すぐに小さく叫んでイタリアは達した。ドイツは震える彼の身体をしつかりと抱き締めながら、その迸りを掌で受け止めてやる。

「はっ、はあっ」

深く何度も息を吐くイタリアにキスをして、しかしドイツは既に湧き上がる欲望を抑えることができなかった。もつと見たい——イタリアの淫らに乱れるさまを、もつと。

「まだだよ」

「え？」

ドイツは再びローションを手に取り、今度はイタリアのそこへ直接滴らせた。

「え？え？う、うそ……」

声を震わせて目を見開くイタリアへ、

ドイツは優しく微笑んで囁く。

「何度でもいかせてやる、覚悟しろよ、イタリア」

*

「えーっ、あ、あれ、見られてたんだ……」

「……うむ」

翌朝。あれからドイツに何度も責め立てられ、幾度もいかされたあと漸く繋がる頃にはイタリアは既にぐったりと消耗していた。

さすがにやりすぎたと反省したドイツはイタリアを気遣って朝食を作つてやったのだった。未だ腰の立たないイタリアを支えるようにベッドへ起こし、カフェオレを手渡しながらドイツは小さく頭を下げる。

「だからなんとかお前を満足させたくて……少しやりすぎてしまったな、すまない」

イタリアは慌てて首を振り、あれは違ふんだよ！と唇を尖らせた。

「べ、別にドイツとの、その、それが不満だったとかそういうんじゃない」

……ドイツがお風呂入ってる間に、その、思い出しちゃったから……」

「え？」

「だから、ドイツが……俺にしてくれたこととか、いろいろ……」

それでまた興奮しちゃったただけなんだよ、とイタリアは顔を真っ赤にして言った。

「……そう、なのか？」

こくこくとイタリアは頷いた。

「だから、いつものままでも充分俺は満足だよ」

なんということだ、ただの勘違いだったなんて！ドイツは愕然とし、自らの愚かさを呪った。あれだけ悩んだのは何だったのだ、真つ先に本人に確認すべきだった。恥ずかしい、顔から火が出そうだ！

「夫婦だもん、これからは何でも訊いてね。俺、ドイツに嘘なんか絶対つかないから」

イタリアはがつくりと項垂れるドイツを抱き締めて、その頬に甘く甘くキスをしたのだった。

Special Guest

お道具本発行おめでとうございます！
ナイスお道具！というわけでお呼びいただきまして大変光栄でございます。
あれやこれやと楽しく妄想できました。
御本の出来上がりを楽しみにしております！

えーお読みくださった皆様にもどうもありがとうございます、
普段はライドウやらネウロやらでえげつないSMなんかを
書かせて頂いております。少しでもお楽しみいただけたら
これほど幸せなことはございません。
またお会いできればうれしいです！
それでは～～

M1号

M1go.

URL><http://m-angelus.net/phero/>



Vermilion Pleasure Night

Deutsch x Italia Theworldwar Afterseries of Axis Powers Hetalia

どうもエロ本とかかればお呼びたてして書いて頂いてる気が
しなくもないんですが、毎度ありがとうございます。
そしてかなり早めに頂いていたのに、発行が遅れてしまって
本当にすいません。もうね、何と云うかアレな話なのですが
『独伊好きだよ』と言うお言葉にかまけて私の妄想をひたすら
聞いて頂いてしまっているもので、もう何と云うか、妄想を
具現化して頂いている様などツボ独伊を毎回下さいまして
本当にありがとうございます。もう本当に。
「怖くない怖くない」とナウシカばりになだめながら
好き放題していやがるドイツが大好きです。
それ以上にさせてあげるイタリアが大好きです。
いやもう本当にいつもありがとうございます。
またいずれ是非！イヒヒ！

Comment Press.



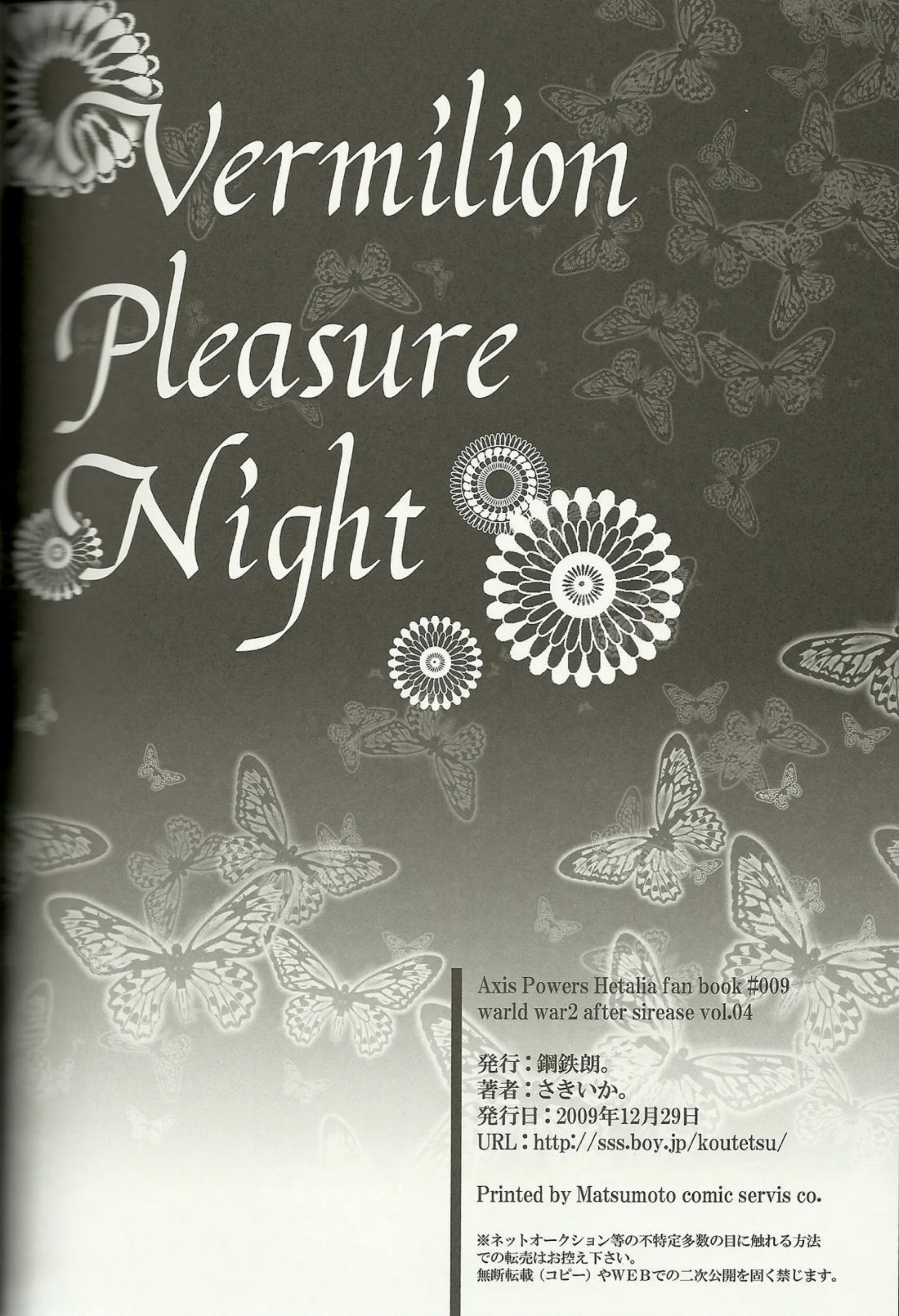
Vermilion Pleasure Night

Deutsch x Italia The worldwar Afterseries of Axis Powers Hetalia

続いちゃった…！まさかの展開に自分がビックリです、さきいか。です。
…まあ続いたといっても、1冊にまとめて60P本になる予定の前後編の後編が時間の都合上描写できないぞー！ええいならば分冊だー…という、こう乱暴な流れの都合でこうなってしまいましたが…一応、前編だけでも読み応えだけはある…はず。なにせいか。の中の人も含めた同人の歴史の中で初めて！海苔、または羊羹。を。描きました。テーマは男性向けでした。色んな意味で。ホモですが。修正箇所自体も過去最多です。…正直、多分大丈夫だと思うのですが、短くないオタ歴史で初めて赤紙怖いです。大丈夫だと思うけど。何と言うか、エロは好きだけど別に直接描写は…と言う人間だったのですが独伊にハマってからは、こう…その…形状差ですとか。色の違いですとか。剥けてるとかどうとか。…そんな部分にまで萌えて仕様がなくなり。故にこの有様でした。なのにホンモノは入ってないんだよね！そうだよね！びっくりだよね！…前編だけだと心臓に悪い箇所が終わってしまってますが独伊なので！砂糖の蜂蜜漬けミルクなので！オチは勿論もうね、勿論ド甘で。ついでに本物をイン。遂に、ようやく、ホールイン。来年の独伊プチまでには頑張ってお出しますので、宜しければまたお付き合いください！

Ending Talk

※…というような状況なもので背表紙がこぼれてすみません…
MCS様も、何度も色々とお診察させて頂き、本当にスイマセンでした…！
次こそ普通入稿…（余裕と言えないのが辛い）

The background of the entire page is a dark, textured surface. It is adorned with numerous white line-art illustrations of butterflies in various sizes and orientations, scattered across the space. Interspersed among the butterflies are several stylized flower designs, including large daisy-like flowers with many petals and smaller, more intricate circular floral motifs. The overall aesthetic is elegant and thematic, likely related to the book's title.

Vermilion Pleasure Night

Axis Powers Hetalia fan book #009
world war2 after sirease vol.04

発行：鋼鉄朗。

著者：さきいか。

発行日：2009年12月29日

URL：<http://sss.boy.jp/koutetsu/>

Printed by Matsumoto comic servis co.

※ネットオークション等の不特定多数の目に触れる方法
での転売はお控え下さい。
無断転載（コピー）やWEBでの二次公開を固く禁じます。



Vermilion Pleasure Night

Deutsch x Italia TheworldwarAfterseries of Axis Powers Hetalia

バミリアン
Vermilion
Pleasure
Night
プレジャー
ナイト

04

WWA sriase
(World War2 After)
Deutsch x Italy

R18

Adult only

Axis power
HETALIA

Only Fan book vol.09

鋼鉄朗。/さきいか。

All production.

